

翻訳の正体

MOTOI, Kazuyo / 宗意, 和代

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

153

(終了ページ / End Page)

174

(発行年 / Year)

2012-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022652>

翻訳の正体

宗 意 和 代

はじめに

今「本」の世界は電子書籍の登場により過渡期にある。中世の修道院で作っていた羊皮紙の写本の時代から活版本になったとき、活版本を読んで済ませている人たちに対してオックスフォード大学の教師たちは「そんな汚いものには価値がない」と言ったという。けれど、その後の50年に、2万5000点、350万冊くらいの書物が出版された。それまでの何百倍もの量である。要するに人々のニーズがあったということだ。媒体は変化しても読み物は残ったのである。今も同じではないだろうか。電子であれ、紙であれ、人々の要求に応える内容であれば「本」は読まれ続けるはずだ。問題は中身である。筆者は長らく翻訳業に携わってきた者として、翻訳物の読者が減り続け翻訳不況とまで言われる昨今の状況を懸念している。しかし、その一方で明治のころに初めて訳された古典的な作品の新訳版が次々に出され様々な批評を買いながらも読まれている事実期待を持っている。翻訳物は原作者と翻訳者という二人の力からなるもので、読み方によっては、一人より二人の力の価値を謳歌できるものだと思う。今や世界の人口は70億人に近づいているが、日本の人口は1億3000万人に満たない。単純に考えて、日本人が生み出せる本は、世界中の本の1/70くらい、ということになる。これは日本人の著者が書いた本だけを読んでいると面白い本に出会う確率が、1/70くらいに下がる、ということの意味する。やはり翻訳物をもっと読まれるべきではないか。多くに敬遠されるのはなぜなのか。そこで、ある翻訳小説を題材に、実際の翻訳者の仕事を検討する中で現在の課題を確認し翻訳物の将来について考えたいと思う。

1. 原作について

翻訳物の問題について考えるにあたり、その題材は長く読み継がれ今後も読まれていくと考えられる古典的な翻訳作品を取り上げるのが適当と考えた。そこで本稿では明治時代に初版が刊行され今に至るまで読まれているフランシス・ホジソン・バーネット原作の『小公女』を取り上げる。

『小公女』は、明治のころから今に至るまで何度も訳され読まれてきた。常に少年少女向けの文学全集に名を連ねてきた古典的名作である。話の内容は、セーラという少女が父の死により裕福なお嬢様から一転して乞食同然の身の上となる。セーラは、さまざまな辛い仕打ちを受けるが、やがて亡父の友人が現れ再び金持ちの世界に戻っていくというものである。一般に健気に耐える少女が幸福になるシンデレラストーリーといった印象で多くの読者を魅了した。原作はフランシス・ホジソン・バーネット“A Little Princess”(1905)(以降“A Little Princess”と記述する)であるが、この“A Little Princess”は、その約10年前に書かれた“Sara Crewe or What Happened at Miss Minchin’s”(以降“Sara Crewe”と記述する)を改訂したものである。オリジナル“Sara Crewe”は1887～88年に雑誌セント・ニコラスに連載された後1888年に単行本として出版された。著者バーネットはこれを自身の手で1902年英国(タイトル:A little un-fairy princess)、1903年米国(タイトル:A Little Princess)で劇化し、その劇の成功を見て作品を書き直し1905年に米国の劇と同じタイトル“A Little Princess”として発表した。それは話の大筋をそのままに頁数を大幅に拡大したものであり、著者が主題の表現手法を変えることにより結果的に内容を成熟させたものとみられている(Holman, 1972, p167,361)。日本では“Sara Crewe”が1893年に明治の翻訳者若松賤子の手で訳され、そのとき『小公女』の邦題が付けられた。ただし、その若松以後『小公女』として出たものはすべて改訂された“A Little Princess”の翻訳である。

著者バーネットは1849年イギリスの工業都市マンチェスターに生まれた。三歳で父を亡くした後、家業が倒産し貧窮の果てに1868年に米国に移住する。やがて1886年“Little Lord Fauntleroy”(邦題:『小公子』)の大ヒットで人気作家となった。米国で人気作家となった後に英国に土地を借り見事な庭園

つきの邸宅を構えた。“A Little Princess”と“Secret Garden”(秘密の花園)は、そこで執筆されたものである。米国に家族を残しながら頻繁に英国に渡り長期滞在したことから生涯祖国英国を思う英国人であったと言われている。

“A Little Princess”の舞台は英国ロンドンの学校である。

学校物語というジャンルはイギリス特有のものである、なぜならイギリスの教育は階級問題に他ならないからだ。(ジョージ・オーウェル)

少なくともイギリスの教育は、今なお紳士気取りの風習にすっかりかぶれている。すなわち私立小学校では、生徒たちは学校生活の四六時中、階級意識を吸い込んでいる。そして教育、大体において国家の管理を受けているから、現状を守ることになるために、できるだけ若人たちの批判力を抹殺し彼らを危険思想に近づけないようにしなければならない。(パートランド・ラッセル)

オーウェルやラッセルの言葉にあるとおり英国の学校は英国社会そのものであり、英国社会特有の階級の意識がそのまま露呈していた。現代の人気小説『ハリー・ポッター』にも、やはり学校における階級意識が示されている。

イギリスの特に児童向けの作品は比較的最近まで、もっぱら中流階級(ミドルクラス)の子どもたちのために書かれてきた。産業革命によって富を蓄え、1832年の選挙法改正によって政治的権力を獲得した、この階級はイギリス帝国の興隆や制度の充実とつながる。19世紀の文学は彼らがつくったものとも言われ「イギリスの国民性は本質的に中産階級的」という見方もある。そして、「イギリスの核心が中産階級なら、中産階級の核心はパブリックスクールという教育制度だが、この異様な制度はイングランド特有のものである。」(E・M・フォースター)とも言われる。英国の学校物語は主に中産階級の子どもを対象に、まずこの階級特有の価値観を打ち出すことで、子どもたちを啓蒙・教化しようという狙いがあった。

さて、『小公女』も学校物語である。これまで何人かの訳者のものを読んだ

が特に階級のことを意識させられたことはなかった。そこで、まず原作に立ち返ってみた。すると、なるほど登場人物はいずれも、その所属階級がわかるように描かれている。‘class’ (「階級」) というで言葉で直接的に示されているものばかりではないが人物描写の中にその所属階級を示す言葉は必ず存在する。邦訳を読んでいる限り全く気づかなかったものが、原作にあたれば、ほとんど一目瞭然であった。私たち日本人には英国人のような階級意識はない。だからニュアンスで読み取れないのは当然かもしれない。しかし原作にはきちんと言葉 (英語) で示されていた。原作に見えた階級を示す言葉はいついどのように処理されたのだろうか。原作と邦訳の間で翻訳者はどのような仕事をしたのだろうか。

2. 翻訳者の仕事

2.1. Business woman と Working woman

階級を意識して原文をあたってすぐに ‘Business woman’ と ‘Working woman’ という二つの階級表現を見つけた。business woman はセーラを「いじめる」役の学校経営者ミンチン先生のことであり、もう一方の working woman はセーラを助けるパン屋のおばさんのことである。それに気づけば悪のミンチン先生に対し善のパン屋のおばさんという風に二人を対称的に書かれているように読み取れる。邦訳ではまるで気づかなかった。そこで幾種類の訳例を改めて確認した。

Business woman

But she was a hard, grasping business woman; and, after the first shock of disappointment, had seen that … (“Sara Crew”)

併し至って、薄情で欲張りで世才に長けた女でしたから、大きな当てが外れると見てから、早速に一と思案しました。(若松 1896)

Miss Minchin was a business woman, and would be shrewd enough

to see the truth. She could not afford to do a thing which would make people speak of her as cruel and hard-hearted.

ミンチン先生もなかなか目先のきくひとだと思っていたので、その道理に気がつくはずだと思った。自分が残酷な冷たい心の持ちぬしだというわさをまきちらすようなことをするはずがない、と知っていた。(伊藤 1956)

ミンチン先生もまたなかなか世渡りじょうずな人だと見抜いていたので、その道理に気がつくはずだとかんがえた。(谷村 1985)

Then Mr. Carmichael explained—in the quiet, level-toned, steady manner of a man who knew his subject, and all its legal significance, which was a thing Miss Minchin understood as a business woman, and did not enjoy.

ミンチン先生は実務家としてその話をすぐ理解はしたが、喜びはしなかった。(川端 1961)

ミンチン先生も事業家ですから、よくわかったのですが、喜びはしませんでした。(中山 1993)

Working woman

I am a working woman, myself, and can't afford to do much on my own account, and there's sights of trouble on every side; but if you'll excuse me, I'm bound to say I've given many a bit of bread away since that wet afternoon, just along o' thinkin' of you. An' how wet an' cold you was, an' how you looked,—an' yet you give away your hot buns as if you was a princess." (Sara Crew)

わたしは御覧の通り貧乏暇なしと稼いで居るんで、自分の持ち出しじゃ

あ何も大したことは出来やしませんがね、(若松 1896)

I am a working-woman myself and cannot afford to do much on my own account, and there's sights of trouble on every side; ("A Little Princess")

私に施しをさせて下さるなんて、うれしゅうございますわ。御覧の通り、私はほんのもうその日暮しで、自分の力ではとても大したことは出来ないんでございますの。気の毒な人はそこら中におりますのにね (菊池 1930)

なお 1930 年の菊池寛の訳ではミンチン先生の business woman の箇所が省略されていた。

いずれの訳も「階級」は読み取れないものの、原文の英語の意味は汲まれている。ただし、それぞれ人物の社会的立場を示す表現としては捉えられていない。

たとえば「善」役のパン屋のおばさんが労働者階級であることを意識すれば、セーラが "Can I work?" she said. "If I can work it will not matter so much …" 「働かして下さいますの？ 働けさえすりゃア、何もそう悲しかアありませんわ……」(菊池 1930) というくだりが重なり、英国上流の働かないことを美德とする意識に対して「労働」にずいぶん好意的であることに気づく。ちょうど書かれた当時、現実の「社会」では 1881 年に社会民主連合 (Social Democratic Federation) が設立され、その指導者たちによって煽動された労働者の暴動が、1886 年にロンドンで発生している¹⁾。翻訳により原作に示された社会性が消えてしまっている。

2.2. ミドルクラスの Respectability (Respectable)

‘respectability’ は、本来は「尊敬に値すること」「立派であること」の意味で中流階級の道徳的な指針であった。もとはビクトリア女王がこれを実践する生活信条を示したことから、中流階級が「尊敬に値すること」として道徳的指針としたものであった。だが作品が書かれた当時、中流階級の上昇志向は「分をわきまえない」ものとして上からは疎んじられ下からも軽蔑され、中流の

上昇志向を示す ‘respectability’ の語は、外見のみ立派に見えるようにする虚栄の姿勢、「体面重視」という意味で中流階級を象徴する言葉となった。たとえば中産階級は社会的体面を保つため（= for respectability）に、男性は収入を確保できるまで結婚を延ばし、余裕がなくとも使用人を雇い、家具などで見栄をはった。

作品の中でミドルクラスのミンチン先生に対し、この意味でしばしば使われている。

She was very like her house, Sara felt: tall and dull, and respectable and ugly. She had large, cold, fishy eyes, and a large, cold, fishy smile.

ミンチン先生はこの家にそっくりだ、とサアラは思った。背が高くって気むずかしそう、で身じまいがよくって、美しくないひとであった。（伊藤 1956）

ミンチン先生はこの家にそっくりだわ、とセーラはおもった。背が高くって、いんきで、身だしなみがいいのに、みにくい人だった。（谷口 1985）

“What a bed for a child to sleep in—and in a house which calls itself respectable!

こんなベッドに寝かせるなんて。しかも、えらそうなことをいう学校のなかでさ！（中山 1993）

とにかく、教育をしようという人間の家で、こんな寝台にこどもを寝かせるなんて。（伊藤 1956）

とにかく教育事業だなんて言ってるくせに、なんというベッドに子どもねかしておくんだろう。（曾野 2007）

とにかく教育者でございという顔つきをしている人間の家で、こんな寝台に子どもをねかせておくなんて！（谷口 1985）

菊池 1927：該当箇所省略

Sara often thought afterward that the house was somehow exactly like Miss Minchin. It was respectable and well furnished, but everything in it was ugly; and the very armchairs seemed to have hard bones in them.

かなりきちんとしていて、造作などもよく出来てはいましたが、家にあるものは何もかもぶざまでした。（菊池 1927）

家の中は堂々として、立派な家具がおいてあったが、それはどれも醜かった。（伊藤 1956）

たてものはどうどうとしていて、りっぱな家具がおいてあるのになにもかみにくく見えるものばかりであった。（谷口 1985）

このようにミドルクラスのミンチン先生に対する respectable は、1905 年の ‘A Little Princess’ にたびたび出てくる。だが、オリジナル ‘Sara Crewe’ では次のセーラに対する respectable のみ、その意味は元のビクトリア女王の信条に由来する「立派であること」に準じている。

As you have the things and are to have new ones when they are worn out, you may as well go and put them on and look respectable; and after you are dressed, you may come downstairs and learn your lessons in the school-room.

着替えて来て、シャントしていたらよかろう。そうして、おまへ、着替えたら、下へおりて、講堂で自習するが好いよ。（若松 1894）

respectable の使用の変化は、ちょうど 19 世終わりから 20 世紀にかけて「ローアーミドルバッシング」が特に目立ってきた時代状況に比例する。

それは時代の異なる作品でみても明らかだ。1813 年ジェーン・オースチンの “Pride and Prejudice” と 1915 年サマーセット・モームの “Of Human Bondage” の二つの英国作品にも respectable の語はたびたび出てくる。特に 1915 年『人間の絆』にはミドルクラスにあてられた respectable が散見される。

They were of a respectable family in the north of England; a circumstance more deeply impressed on their memories than that their brother's fortune and their own had been acquired by trade. (“Pride and Prejudice” 1813)

イングランド北部の相当の家柄の出で、それが彼らの記憶に深く刻み込まれ、兄と自分たちの財産が商売で儲けられたものだという事情の方は、忘れがちであった。ビングリー氏は、十万ポンドものの財産を、父から譲りうけた。²⁾

It was no one of the more crowded of those cheep restaurants where the respectable and needy dine in the belief that it is bohemian and the assurance that it is economical. (“Of Human Bondage” 1915)

そこは上品ぶっているが金のあまりない者が気がおけなくて安いというので利用するような安レストランとはちがうところだった³⁾

このように ‘respectable’ の語は、ビクトリア女王により意識された後、中産階級を表現する言葉としての使用が顕著となった。

2.3. アッパークラスの Innocent

セーラの父 Crewe はイートン校 (Eton) 出身である。

Tom Carrisford, who played cricket at Eton with him. ("A little princess")

イートン校(イギリスの名門校)でいっしょにクリケット(十一人が一チームで、木のボールをうちあうイギリス人のすきな競技)をしてあそんだこのカリスフォードが。(谷村 1985)

イートン校でいっしょにクリケットをして遊んだこのトム・カリスフォードを。(伊藤 1956)

なお、このセーラの父の設定は改定版で加えられたもので元の“Sara Crew”に父の学校は示されていない。ただし Eton 自体は次のように「いわゆる名門」の意味で一か所みられる。

There was not a child in the nursery, from the Eton boy who was the eldest, to the baby who was the youngest, who had not laid some offering on her shrine. ("Sara crew")

この家の子どもは、大学にいる総領から末の赤ん坊まで、セイラを珍重する余りに、何かセイラに献上せぬ者は有りませんでした。(若松 1894)

英国イートン校は実在するパブリックスクールの名門中の名門であり、歴代の首相をはじめとする数多くの著名人を輩出している。今でもイギリスの裕福な家庭では、子供が生まれるとすぐにイートンの入学希望者リストに名前を登録するほどだ。相当の難関校のようだが何より大金がかかる。最近のデータだが2005年の年間学費は寄宿費を含めて2万2380ポンド(日本円にして約450万円)と、平均的な収入のイギリス人家庭では到底手の出ない額である。原作が書かれた当時のEtonは、まさに貴族の子息の学校だった。つまり、セーラは学校経営者、business womanのミンチン先生とは違うクラスの人間ということである。

パブリックスクール出身で英国の階級問題について多く書いたフォース

ターは次のように述べている。

彼らはいいことはみんなパブリックスクールのせいにする。パブリックスクールの礼賛して、「ウオータールの戦いの勝利はイトンの運動場のおかげだ」という言葉をすぐ口にしがたがる。⁴⁾

フォースターが言う、これがミンチン先生らのセーラの父親に対する目線である。そのような裕福な家の子息のクルーはどのような人物か。

Captain Crewe was a rash, innocent young man

まだ若くって経験のない人 (若松 1894)

気のはやい、あまり世故にたけない人 (伊藤 1956)

気が早くて世間なれがしていないので (曾野 2007)

訳出なし (菊池 1927)

クルーには‘innocent’の形容詞があてられている。‘innocent’には、‘experience (経験)’の反対の意味がある。原作者バーネットは、“Sara Crewe”の前に書いたヒット作『小公子』の中でクルーと同じ立場の英国貴族の三男である主人公セドリックの父親について次のように書いている。

he had not been brought up to work, and had no business experience.

是迄の育ちが育でしたから働いて活計を立てることに慣ず、事務上の経験も有ませんかつたが

上流階級は、働かないことを美德とし財産で暮らしている。ただし家を継がない二男や三男など、領地をもてない者は働かなくてはならない。だが経験のない彼らは金を稼ぐ術も管理する術も知らない。

裕福なアッパーミドルの家に生まれたアガサ・クリスティは祖父をなくした

後、財産管理人の手にゆだねていた、「あるはず」の遺産が存在せず急に貧窮し、それがもとで父親は病気になり結局亡くなってしまう。

父は困惑し意気消沈してしまったが、もともと事務的な人ではなかったのだからどうしていいかわからなかった。⁵⁾

生活力のない裕福な家の子息が「金」のことで頭を悩まし苦勞の果てに病気になるといふ、クルーやセドリックの父は、このクラスの典型的な人物像といえる。

2.4. 労働者階級の「H の音」

物語は裕福だったセーラは下働きのベッキーに同情し優しく思いやる。自分の部屋に呼びお菓子をあげたり、ベッキーにつらくあたるミンチン先生に対してかばったりする。けれど自分が父を失いベッキーと同じ立場におかれたとき「ベッキーみたいになる」ことを恐れる。

“If I do not remind myself of the things I have learned, perhaps I may forget them,” she said to herself. “I am almost a scullery maid, and if I am a scullery maid who knows nothing, I shall be like poor Becky. I wonder if I could QUITE forget and begin to drop my H’S and not remember that Henry the Eighth had six wives.”

「あのかawaiiそうなベッキーみたいになるわ。まるっきり、わすれてしまうなんてことがあるのかしら。歴史がうるおぼえになって、ヘンリー八世が六人のお妃をもっていたということもわすれてしまうわ」(川端 1961)

「そして、もし何も知らないとなれば、わたしはあのかawaiiそうなベッキイと同じことになってしまう。わたしはすっかり忘れてしまうだろう。そして、歴史のことがうるおぼえになり、ヘンリー八世が六人のお妃を持っていたことなんかも忘れてしまうだろう。」(伊藤 1956)

「気をつけないと、習ったことまで忘れてしまいそうだわ。これで、何にも知らないとすれば、ベッキイと選ぶところなくなるわけだわ。でも、私忘れることなんて出来そうもないわ。歴史の勉強なんか、殊にやめられないわ。ヘンリイ八世に六人の妃があったことなんか、忘れられるもんですか。」(菊池 1927)

「あたしはまるで下働きみたいだ。そして、もしなんにも知らない女の子になったら、あのかわりそうなベッキーとおなじことになってしまう。hの音をおとしてだらしくしゃべったり、ならったことすっかりわすれてしまつて。れきしのことがうろおぼえになり、～」(谷村 1985)

邦訳で「hの音」が訳出されているのは1985年の谷村まち子訳のみであった。「Hの音」を落としたしゃべり方とは、労働者階級が話す、コックニー訛りのことである。英国では言葉遣いは階級差の重要な指標である。話せばクラスがわかるというが、とりわけ「Hの音」を落とすコックニーの言葉は独特で隠せるものではなく、また直るものでもないとみられていた。

コックニー訛りがいかに独特であったかについて、1900年から1903年ロンドンに滞在した夏目漱石は日記に次のように綴っている。

日本にいる人は英語なら誰の使う英語でも大概似たもんだと思っているかも知れないが、やはり日本と同じ事で、国々の方言があり身分の高下がありなどして、それはそれは千違万別である。しかし教育ある上等社会の言語はたいい通ずるから差支ないが、この倫敦のコックネーと称する言語に至っては我輩にはとうてい分らない。これは当地の中流以下の用うる語で字引にないような発音をするのみならず、前の言ばと後の言ばの句切りが分らないことほどさう早く饒舌るのである。⁶⁾

映画『マイ・フェア・レディ』はまさにそのコックニー訛りを克服する話である。

現代においても労働者階級出身のサッチャー元首相が、訓練して自分の発音を RP (Received Pronunciation: 容認発音) というオックスフォード大学、ケンブリッジ大学などパブリックスクールで話されていた英語に変えたことが知られている。

セーラは労働者階級のベッキーと仲良くするも、やはりそのクラスにはなりたくない。これは階級社会に生きる者の現実である。

貧しい中産階級の家生まれたオーウェルも次のように言っている。

何がどうなろうと。われわれには H の発音のほかに失うものは何ひとつないのだから

英国階級社会は固定的なものではあり、既定の階級の枠からはみ出そうとすることは「分をわきまえない」ものとして何より嫌われた。だが中産階級は下層の労働者階級と一線を画したく、また機会があれば上流の社会に入りたいという本心を見せたため、上からは疎まれ、下からは軽蔑された。姿勢が見られたため上流は中産階級の上昇志向を疎んじたが、下層の労働者階級も、そうした中産階級を軽蔑していた。階級社会の問題を指摘したフォースターはパブリックスクール、キングスクール出身だが、そのキングススクールの附属に通ったという設定のモーム『人間の絆』の主人公フィリップは、労働者階級の中産階級に対する思いを次のように語っている。

中産階級の者を羨むことはない。(中略) 中産階級の暮らしは堅苦しすぎるのである。それに中産階級の者はひ弱で肉体労働ができないというので少し軽蔑していた。⁷⁾

階級社会の問題は異なる階層同志が一切相容れないところにあった。時の政治家ベンジャミン・ディズレーリは、産業革命期のロンドンにおける貧富の差を描くなかで、相容れない労使の関係を「二つの国民」(the two nations)と呼んでいる。

Two nations between whom there is no intercourse and no sympathy; who are ignorant of each other's habits, thoughts and feelings, as if they were dwellers in different zones or inhabitants of different planets; who are formed by different breeding, are fed by different food, are ordered by different manners, and are not governed by the same laws ...The rich and the poor. (Disraeli, 1976) ⁸⁾

二つの国民。その間には何の往来も共感もない。彼らは、あたかも寒帯と熱帯に住むかのごとく、また全然別の遊星人であるかのごとく、おたがいの習慣、思想、感情を理解しない（筆者訳）

以上の背景を踏まえ、再びセーラのセリフの「h の音」を考えると、これは原作の読者の共感をよぶものとも、また問題意識を掻き立てるものともいえる。原作者には書いた目的がある個所であり、したがって訳出すべきだろう。ただし「h の音」と訳すだけでは原作者の書いた意図は伝わらない。具体的な背景を込みで伝える方法を考えなくてはいけないところである。

h 音を落とすベッキーのセリフは、原作では文法も語彙の綴りも誤った表記になっており、それだけで他のクラスとの違いはわかった。だがそうした表記の違いは翻訳で示すことが難しいもので、実際この作品の場合セーラとの上下関係から敬語的表現が選択され、結果的に礼儀正しく丁寧な表現になっているものが多く、少なくともコックニーの粗野な感じはなかった。

『小公女』の原作者パーネットの作品には、いわゆるスラングが出てくる作品が多い。原作と同時期、英国で空前のベストセラーとなっていた「シャーロックホームズ」のシリーズにもやはりスラングが多用されている。ホームズのある訳者は、その解説に次のように書いている。

ホームズ物語にはアメリカ人がしばしば出てきてアメリカの俗語を盛んに使うが、こいつを日本語に表わすことはちょっと不可能であろう。日本語は一種類だからだ。

（延原謙訳、コナン・ドイル著『恐怖の谷』新潮社、1985）

確かに欧米の身分や地域による言葉の違いを訳し、そのニュアンスを伝えるのは訳者にとって至難の業だが、ある意味腕の見せ所でもある。実際様々な方法がとられており、全部ひらがな表記にして稚拙さを出したり日本の方言に変えたりするものもある。たとえば間もなく刊行予定のミステリーでは次のように訳文に説明が織り込まれている。

‘I want to ask you to stick around’, he said. He pronounced it wanna ax. ～

「もうしばらくいっしょにいてくれんかい」あまり教育を受けていない年取った黒人からときに聞かされるしゃべり方で、彼は言った。

‘Plenty big enough to help us out, if you wanted to.’

He said it he’p.

「そんなにでかけりゃ、おれたちの助けにだってなれるだろ。アンタがその気になってくれればだが」

「助け」という単語もうまく言えなかった。⁹⁾

翻訳者は、原作に忠実に、かつ、読みやすい自然な訳を心がける。『小公女』を含め、ここに挙げた例のすべては、その双方に努めた結果であることは確かだ。ただし、この二つはとかく相容れないものである。訳者は、いずれか選択を迫られ、たいていは読みやすさを優先する。ここでいえば人物の「階級」が分からなくても日本の読者が違和感を抱くことはない。たとえ、それが原作の国では、人物表現として不可欠なものであったとしてもである。

階級の違いをなくすということは、みずからの一部を亡くすことに他ならないという事実を覚悟しなければならない。

階級制度の枠外へ脱け出すために、個人的な高慢さを抑えるだけでなく、好み的大半や偏見も抑えなくてはならないからだ。…ついに、本来の自分の名残をとどめることはできなくなるだろう¹⁰⁾

元来、英国人の意識の根底にある「階級」意識と同じものを日本人は持ち合わせていない。そのような事柄は訳すのが難しく、また訳しても理解しづらいものである。

3. Situation を伝える

外国物を読んで、当該外国の読者と同じように理解するためには、その外国の状況 (situation) を知らねばならない。イートンにしても h の音にしても、言葉を「きちんと」日本語に置き換えたとして、英国の実情すなわち situation を知らねば、その言わんとするところは読み取れない。つまり状況説明が必要ということである。実際、ある翻訳物 (『ミルン自伝 今からでは遅すぎる』) のアマゾンのコメントには「英国の戯曲や詩や散文の作品や作家について、そして雑誌「パンチ」のイギリス社会における意義についての知識と理解があれば、数段楽しめます」といったコメントが寄せられている。だが翻訳者は内容を正確に伝えるだけでなく、あるいはそれ以上に読みやすく仕上げることが求められる。situation をすべて伝えようとする場合、訳文に説明を補うか、または注釈などをつけることになる。だが、それは結果的に読みやすさに逆行することが多い。そのため現実には状況説明が必要な箇所は作品の大意に影響がない範囲で省略されたり変更されたりすることもしばしばある。

だが翻訳物を手に取る人は少なからず外国の未知の物や人を知りたいと思っているのも事実だ。自分を進化させてくれたのは「翻訳書や洋書の原書が多い」という勝間和代氏は同時に次のように述べている。

ただ、翻訳書と原書を読み比べると、原書では 75 事例が 40 事例に減っていたり、また各事例に日本のケースを補ったものが、蛇足としかいえないようなものが含まれているということがある。¹¹⁾

2010 年 6 月にでたカール・マルクス『共産党宣言』新訳は一文ごとの詳細な解説を含んだ付録資料が 400 ページに及ぶ。これを訳した的場昭弘氏は「マルクスの著作は実はきちんと読まれてこなかった」述べている。翻訳物は未

知との遭遇であり、わからないことを知れる醍醐味がある。よく知っているようなことばかり書いてあるような文章は訳す必要はないともいえる。作品を situation 込みで完全に伝えられたとき、それは原作に翻訳の力が加わり「翻訳物」として国内文学とは別の価値を持ったものになる。situation をどう伝え理解させるかということこそ今の「翻訳物」の課題である。

おわりに

『小公女』など西欧文学がしきりに翻訳されたころは外国へ憧れる気持ちが強かった。だかもはやそういう時代ではない。外国の読み物というだけで単純に惹かれることはなくなった。そして昨今は日本の文学の質も上がった。そのような中で翻訳物はとかく読みやすさを求められている。その結果として翻訳物ならではの価値は伝えられていないように思う。翻訳物を好む人は、たいいてい新しいこと、知らないことが知りたくて読むという。異国の風土や思考を理解できるように訳し伝えるのが翻訳者の仕事だろう。特に外国との距離が狭まった今日、外国人の思考を知ることが重要である。実際に外国へ行くことも容易な時代だが、人の気持ちは目に見えるものではない。それが見たければ、やはり本を読むしかないのではないか。人の思考は、その人の置かれた状況つまり situation が大に関係する。米国で絶大な人気を誇る元ニューヨーク記者のジャーナリスト、マルコム・グラッドウェル氏は「性格とはむしろ、習慣や志向性や関心のたばのようなものであり、それぞれゆるやかに結ばれ、時と場合と背景しだいで変わる」「現にわたしたちは環境だとか、その場の状況であるとか、自分の周囲にいる人々の個性などに大きく左右されている」と書いている¹²⁾。状況とはつまり situation である。

翻訳物が読まれなくなった理由の一つに、日本の小説の質が上がったということが言われる。著名な日本の作家の一人山崎豊子氏は次のように述べている。

町を書くときに、その町と人間とが結びついていなきや本当じゃない。風土と人間を結びつけないと、書きたくない¹³⁾。

物語はその言葉が生まれた situation とともに成立している。翻訳物の場合、その作品が書かれた外国の situation をすべて伝えることができたとき和書にはないたくさんのことが見えてくるだろう。翻訳者にとっては、テキストの内容が situation 込みで伝えられたとき翻訳物の真の醍醐味を提供できたといえるのであり、目下それを目指しているのである。

翻訳物の価値を十分に味わうために situation をどう伝え、またどう読み取るか、ということが重要である。一つに翻訳者を含む作品を提供する側は、それらを訳文にどう盛り込むか、あるいは訳注をつけたり、別に説明の場所を設けたりすることを考えることになるだろう。その一方で受容する側である読者が、翻訳物を和書とは別の物として読めるような環境を整えることを検討してはどうだろうか。たとえば学校教育の中でなるべく早期に翻訳物の実態を教える。要するに翻訳者の仕事を教えるのである。翻訳物には外国の未知のことが書かれている。見知らぬ国の人が何をどのように考えるのか、なぜそう考えるのかということがわかってくる。日本の小説とは全く別のものとみなすことによって、従来からある作品にも新たな価値が発見されるはずであり、またいっそう多くの読者を魅了するものと考えられる。

参照：邦訳

- 伊藤整『小公女』新潮文庫 1956
 川端康成『小公女』角川文庫 1961
 菊池寛『小學生全集第五十二巻 小公女』文藝春秋社 1927
 曾野綾子『小公女』講談社青い鳥文庫 2007
 谷村まち子『小公女』偕成社 1985
 中山知子『小公女』河出書房新社 1993
 村岡華子『小公女』日本書房 1964
 若松賤子『セイラ、クルーの話 ―ミンチン先生の出来事』少年園 1894

参照：原作

- Frances Hodgson Burnett “A Little Princess” PROJECT GUTENBERG EBOOK
 Frances Hodgson Burnett “SARA CREWE OR WHAT HAPPENED AT MISS MINCHIN’S” PROJECT GUTENBERG EBOOK

注

- 1) Gareth Stedman Jones p291.
- 2) 富田彬訳。
- 3) 行方昭夫訳一中
- 4) フォースター p.203.

- 5) アガサ・クリスティ p.126.
- 6) 夏目漱石 p.254.
- 7) 行方昭夫訳一下 p.317.
- 8) ベンジャミン・ディズレーリ (Benjamin Disraeli, 1st Earl of Beaconsfield, 1804-1881) は、イギリスのビクトリア朝期の政治家。首相にも在任。宿敵ウィリアム・グラッドストーンと共にビクトリア期のイギリス政党政治を牽引した。また、小説家としても活躍した。
- 9) Lee Child "The Hard Way (Jack Reacher, No. 10)" Delacorte Press 2006.
邦訳は近日刊行予定、翻訳はこのシリーズの訳者小林宏明氏のもの。
- 10) オーウェル, 1995, p.190.
- 11) 勝間和代 p.210.
- 12) マルコム・グラッドウェル p.196, p.302.
- 13) 山崎豊子 p.203.

参考文献

- アガサ・クリスティ『アガサ・クリスティ自伝』乾信一郎訳 早川書房 1995
- アラン・アレクサンダー・ミルン『ミルン自伝 今からでは遅すぎる』石井桃子訳 岩波書店 2003
- 安東伸介他編、河合秀和他著 1982『イギリスの生活と文化事典』研究者出版 1982
- E. M. フォースター『ロンゲスト・ジャーニー』川本静子訳 みすず書房 1994
- 勝間和代『読書進化論：人はウェブで変わるのか。本はウェブに負けたのか』小学館新書 2008
- コナン・ドイル『恐怖の谷』延原謙 新潮文庫 1985
- サマセット・モーム『人間の絆』上、中、下巻 行方昭夫訳 岩波文庫 2001
- ジェイン・オースティン『高慢と偏見』上、下巻、富田彬訳、岩波文庫 1994
- ジョージ・オーウェル『ライオンと一角獣』川端康雄編 平凡社ライブラリー 1995
- ジョージ・オーウェル『ウィガン波止場への道』土屋宏之、上野勇訳 ちくま学芸文庫 1996
- ジェフリー ウォルフォード『パブリック・スクールの社会学』竹内 洋・海部優子訳 世界思想社 1996
- 夏目漱石『倫敦消息』夏目漱石全集 10 所収 筑摩書房 1988
- バートランド・ラッセル『怠惰への賛歌』堀秀彦・柿村峻訳 平凡社 2005
- 林 信吾『しのびよるネオ階級社会―“イギリス化”する日本の格差』平凡社 2005 p.122
- マルコム・グラッドウェル『ティッピング・ポイント―いかにして「小さな変化」が「大きな変化」を生み出すか』高橋 啓訳 飛鳥新社 2000
- 山崎豊子『小説ほど面白いものはない』新潮社 2009
- Burnett, Vivian, *The Romantick Lady: Frances Hodgson Burnett, the Life Story of an Imagination*. New York: Scribner's, 1927.
- Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield. "Sybil, or, The two nations" AMS Press, 1976
- Bertrand Russell "In praise of idleness, and other essays" George Allen & Unwin Ltd. 1935
- C. Hugh Holman "A HANDBOOK To Literature. Indianapolis" The Odyssey Press, 1972
- David Feldman and Gareth Stedman Jones "Metropolis, London: histories and representations since 1800" Routledge, 1989
- Jane Austen "Pride and Prejudice" PROJECT GUTENBERG EBOOK 1813
- William Somerset Maugham 'Of human bondage' New York: Modern Library 1915

<ABSTRACT>

The Nature of Fiction Translation

MOTOI Kazuyo

The paper intends to explore the nature of fiction translation and to discuss the necessity of introducing translated fictions in Japan.

During the past hundred years, many foreign novels have been translated and read in Japan, which have exerted great influence on various time frames of our life. It is said that translating novels is very active in our country.

But conventional wisdom has it that translated novels are not identical to the originals. Translating may be defined as rereading and rewriting for target-language audiences, which makes translations uniquely different from their originals: every time texts are translated they take on a new language, a new culture, new readers, and a new point of view.

But it is also true that we might have read and understand in different mean any thoughts and belief the author wanted to tell and convey to readers. Over the last several years, it is said that translated novels have waned in popularity. Then I guessed as one of translators who are engaged in translation. What kind of role is a translator of novels? Is there any way many people find foreign novels more amusing and interesting ?

I think that translation is not made in a vacuum. Translators function in a given culture at a given time. That is why in this paper, I attempted to investigate and present the original means of one novel at the time when the author had written it. At first, I tried to research and find out “the situation” that is the period background and social environment in which the novel was written, and secondly reviewed how to really translate each sentences of text thereof. Finally, I thought why the translated one is at variance with the

originals.

It is generally accepted that translating novels or fictions are a complex process subject to the influence of numerous variable factors, such as where and when original ones were written, and then translated, and what kind of readers were assumed to be read, etc.

So, I believe I should give insights concerning the cultural-social values in translation of fiction, and would like to introduce the results to Japanese readers at present. Therefore, I attempted to pursue the real mean of original one and reveal its 'identity' investigating the situation where those were written more than 100 years ago, in a foreign country.